知らなかった!?　鎮守の杜のホントの秘密
～神さまと森との大切な関係～

一般社団法人第二のふるさと創生協会代表理事
瀬田玉川神社禰宜　髙橋　知明

鎮守の杜は維持管理が大変!?

皆さんがよくお詣りに行かれる全国の神社には、森があることが多いと思います。
この森のことを、「鎮守の杜」（ちんじゅのもり）と呼びます。
一見何の変哲もないように見える森ですが、そこには何百年・何千年の間、その地域の貴重な在来の動植物が生息し、神さまや地域の人々との営みと密接に関わってきた大切な歴史があります。
実は、この「鎮守の杜」のことですが、神職や巫女さんの間では、厄介者のように感じている人も多いかもしれません。その原因は、維持管理の大変さにあります。
境内には毎日のように葉っぱが落ち掃除が大変です。また台風などの暴風雨による倒木などの災害対策のため、隣地に住宅などが近い場合、枝葉の剪定を定期的に行う必要があります。その作業には、一回に数十万～数百万円という費用が掛かることもあります。機会があれば、ぜひ神社の清掃奉仕にも参加してみてください。
また他にも、当社でも近隣のマンションの住人からこんな苦情があったことがあります。境内とそのマンションとの境界を越えて境内の木々の枝葉が伸びた場合、神社側で剪定するという相互協定があります。また枝葉が境界を越えていなくても、もしも近隣のマンションに大風で倒木などがあった場合、大変な被害が出てしまうので、それを未然に防ぐため、自費で剪定作業をしなくてはいけません。
ある日、そうした事情から境内の樹木の枝葉の剪定をしたところ、そのマンションの住人の一人がやって来て、こんな苦情を言われました。「どうして枝葉の剪定をしたのか」と。その住人によると、「枝葉の剪定をする前までは、西日や参道の街灯の光を枝葉が程よく遮っていたのに、作業した後から光が眩しすぎる。それを「光害」というのだが、どうしてくれるのか」と。
防犯上の理由で、境内の街灯は警察からむしろもっと増やしてほしいと言われていましたが、経費も掛かることでなかなか手が出せない事情もありました。こうした苦情には、さすがに呆気に取られてしまいましたが、類似した事例は、全国の神社でも、「鎮守の杜」の維持管理をする上で、起きていることでもあります。
それでもなお、この「鎮守の杜」を維持管理しようと、神職はなぜ努力しているのでしょうか。

なぜ、神社に「鎮守の杜」が必要なのか？

「鎮守の杜（森）」について、ある辞書で調べると、こんな風に書いています。
『村落を中心としたような一区域を鎮め守る神社の境内にある森。 日本では普通、村落の中や外れに鎮守の社があるが、そこは村落の主要な行事のための集いの場でもある。 この神社には森林が存在するのが普通で、それには、神社の風致を維持するため、また社の修理や改修の用材確保のためなどの目的がある。』

古来、我が国の地域社会には、こうした村落が存在し、その村落の中心には「鎮守の杜」に囲まれた神社が存在しました。そのため、神社には森があるというのが、“神社らしさ”という美意識に繋がったものと考えられます。

そして、その神社では、村落の生活が無事平穏に維持されていくように、神々に祈りを捧げる祭りが行われ、また地域社会を円滑に運営していくための“寄り合い”などの会議も行われていたため、常日頃から地域の大人だけでなく、子供たちにとっても遊びの場にもなっていました。いわゆる“地域の和”が、神社で形成されていました。

ここでは詳しくお話ししませんが、古来、神社にあった集会場所としての機能は、大東亜戦争後の GHQ による占領政策により、全国の地域には公民館が作られ、現代の形に移行していく歴史があります。

さて、お話しを「鎮守の杜」に戻して、改めて詳しくご説明します。

「鎮守の杜」という名前の由来には、歴史的な背景があります。「鎮守」とはその地域を守ってくださる神々のこと。そして、その神々を守る森が「鎮守の杜」。ここには神々が降りたち、鎮まる場所だと、私たちのご先祖様は考えてきました。

だからこそ、日本人はこの場所を特に神聖さを感じ、神々に感謝の気持ちを捧げ、この土地での生活の安寧を祈りました。「鎮守の杜」は常に多くの生命が循環していて、瑞々しさ、青々しさを保つことで、神々が降り立つ清浄な空間を生んでいます。

そのため人々は、場所によっては森が荒れないように間伐したり、弱った木を切るなど、森の手入れをしつつ育ててきました。時には社殿や鳥居などを建て替える際に「鎮守の杜」からいただいたご神木の材料を活用することもあり、切った後には植林をするという循環をさせることで、森を持続可能にしてきました。

今から約１３００年前に書かれた国の公式文書である『日本書紀』には、植林の始まりについて書かれている部分があります。

素戔嗚尊が、「スギとクスノキは舟に、ヒノキは宮殿に、マキは棺に使いなさい。そのためには、たくさんの木の種をみんなで播こう」と人々に教えたそうです。

おそらく当時の様子を鑑みると、山々は深い原生林（奥山）に囲まれていたと思いますが、この時から、その山々の中に存在する森の中では元々少数派の針葉樹が、人々の生活を豊かにする材木として有効であることがわかり、里山での植林という文化が始まったと考えられます。そのことによって、その地域の人々は以前より安定した生活を確保することになります。それは後世にも伝えていくべき知恵として、神社の境内に針葉樹が植林されたとも考えられます。

少し話は脱線しますが、素戔嗚尊と言えば、ヤマタノオロチのお話しが有名ですね。

もしあのお話しが実際にあった出来事を基にしているとしたら、こんなことが考えられるのではないでしょうか。

それはヤマタノオロチの姿にヒントがあります。

我が国最古の歴史書である『古事記』によれば、頭が八つ、尾が八つ、谷を八つ渡るほどの大きな体で、その表面にはコケや杉が生え、腹は血で真っ赤にただれ、目はほおずきのようであると書かれています。

一説には、この姿は、島根県の出雲地方を流れる斐伊川（ひいかわ）の氾濫の様子を描いていると言われています。頭や尾が八つに分かれるように、四方八方に川が氾濫し、体の表面に樹木がある様子は当に土石流。真っ赤にただれた腹は、砂鉄を多く含む川の色を表わしていると。

その自然災害に対して堤を作るなど大土木工事を行い、出雲平野に安定した農業が出来る土地を確保した指導者が素戔嗚尊だったのではないかと考えられています。また、ヤマタノオロチの尾からは草薙剣という鉄剣が出ますが、出雲地方に製鉄技術を革新させたのも素戔嗚尊。鉄は、特に農業に革新的な利便性をもたらしました。その草薙剣を天照大御神に献上したというお話しもありますが、それは大和朝廷が鉄を産出し強大な力を持っていた出雲国を掌握したという意味ではないかという説もあります。

ところで、そもそも日本の神さまとはいったいどんな存在なのでしょうか？

一言で言うと、“人々の生活を保障してくれる対象”が神さまとして祀られています。その対象は大きく３つあります。

①自然万物―太陽や月、水や火、大地や木々など、無ければ命を育むことが出来ません。

②自然災害―台風や雷などは、人々に大きな災害ももたらしますが、それに抵抗するのではなく、災害が無いようにお鎮まりいただくよう神々に祈りを捧げるという思想があったり、一方、津波の後には豊漁になったり、雷（稲妻）が落ちると豊作になるなど、経験値からくる事象を神格化したということも考えられます。

③人々にとって偉大な功績を残した人―例えば、素戔嗚尊、楠木正成、武田信玄、徳川家康、東郷平八郎、乃木希典、靖國神社・全国各地の護國神社のご祭神である英靈、そして歴代の天皇陛下と、人々の生活を守ってくれた存在が、後世の人々によって、神さまとして崇められ、「鎮守の杜」に囲まれた神社にお祀りされるというケースがあります。またこの神々を“現人神（あらひとがみ）”とも呼びます。

故に、神道は一神教ではなく多神教であり、日本の国土には、“八百万神（やおよろずのかみ）”と呼ばれるたくさんの神々が存在し、敬神生活をすることによって、我々の生活を保障してくれているという考え方が、古来、継承されてきました。

「鎮守の杜」は「和の心」の象徴

だいぶお話しが脱線しましたが、森と植林のお話しの続きに戻ります。

おさらいすると、このように日本人は“森を守り、育てていく仕組み”をずっと大切に継承してきました。「鎮守の杜」とは、日本人の自然観や文化そのものと言っても過言ではありません。そして、この「鎮守の杜」は太古の昔からの原生林を今に残す場所も多くあり、貴重な在来の動植物がたくさん生息する“生命の宝庫”でもあります。

「もののけ姫」というジブリ作品をご覧になった方は、木々が生い茂った深い森の中にたくさんの動植物たちがいた事をご記憶の方も多いでしょう。実際に全国の多くの神社の境内には、生態系の頂点の鷹がいたり、狐や狸、兎がいたり、夏にはカブトムシやクワガタ、トンボや蝉が一面に飛び回っていたりしています。

古来、日本人はこの「鎮守の杜」と共に生き、人と自然とが上手なバランスで共存する生活を追求する中に、持続可能な生活を生み出す知恵を学び継承して来ました。

まさに、「鎮守の杜」は“和の象徴”であり、故にそこに神々が宿る意味ともなります。

しかし、現代は人間が森をはじめ自然との上手な付き合いをしていく生活から、距離が離れている人が多くなったことから、先人たちが大切にしてきた自然との共存の知恵を忘却してしまったかのようにも感じます。

私のところには、海外で日本の神道や歴史を研究する学者や大学院生が時々取材したいとやって来ます。もちろん主目的は、神道のこと、神社のこと、祭りのことを、一現場の神職としての考えを聞かれるのですが、時には質問はいわゆる靖國問題のこと、LGBTQ のこと、夫婦別姓問題のことなど多岐に亘ることがあります。

私はその時、その答えは「鎮守の杜」にあると言います。神道では、そもそも教義経典はありません。それは人間が完璧ではなく、人間が発する言葉には必ず矛盾があるため、生きていくための真理は、自然から学び、敬神生活の中から見出すものとも解釈が出来るからです。そして、その根底には「和の心」があります。

「鎮守の杜」は「和の心」の象徴と言いましたが、「鎮守の杜」の中で生きている動植物たちは、地域によって様々であり、その森の中で大多数を占める生き物もあれば、少数派の生き物もある。そして、誰も根絶やしにしたり、除け者にせずに、絶妙なバランスを保って何百年、何千年と循環しながら生きてきました。お互いの立場や価値観を尊重し、共存共栄する「和の心」がそこにあり、日本人の祖先はその生活を実践して来ましたが、現代人はそこからもっと学びを得るべきなのではないかと思います。ゆえに、SDGｓには「和の心」とその象徴である「鎮守の杜」が不可欠なのだと答えます。

奥山と里山のバランスの崩壊から

さて、ではその私たちが忘れかけている“人と森との上手な付き合いのある生活”ということについて、現代の日本の山々が抱える社会問題を事例に、もう少し詳しくお話しします。

約８０年前の大戦前の日本の山々には、「奥山」と「里山」という区域が存在しました。奥山は手つかずの原生林。多種多様な在来の動植物が生育し、水源を守り、山の保水力を高めるなどの機能がありました。

それに対して里山は、材木を育てたり、キノコを採ったり、炭を焼いたりと、人間の生活に必要最低限な恵みをいただき循環させる区域でした。

そしてこの“奥山と里山の境界には、しばしば神社や祠が存在”し「その先は侵すべからず」という戒めがありました。奥山は神々の聖域であり、戒めを無視するとばちが当たって自然のしっぺ返しがあるという、まさに経験値に基づく最適なバランスを把握していた先人の智慧がありました。

ところが戦争で全国が焼け野原になり、戦後復興のため拡大造林という国策で、致し方なく奥山も里山化し、日本の山々は概ね林業の山（多くはスギ・マツ・ヒノキなどの単層林）になりました。その後、昭和 40 年代から安価な外材が輸入され、国産材は徐々に売れなくなり、昭和 50 年代以降、一時隆盛を誇ったたくさんの材木店が倒産しました。現在の林業は、従事者が高齢化し後継者不足に悩む状態です。

林業が経済循環しにくくなった現在の日本の山々には、他にも課題があります。熊や猪をはじめ野生動

物たちが、危険を冒して里に下りて畑などを荒らすのは、山にどんぐりなどの彼らの食べ物が少なく、越冬や子育てをするのに充分に栄養が摂れないためということも一因と考えられます。他にも、針葉樹の単層林から出る大量の花粉は、現代病の花粉症を生み多くの人々を悩ませています。

さらには気候変動の影響からか、毎年のように全国に巨大台風や線状降水帯による豪雨が襲う時代になりました。降水量が多くなった上、多くの山々に植林された針葉樹は根が浅く、保水力も低い単層林の山は、山津波とも言える土砂崩れを起こし、下流の河川では堤防を越える洪水被害も発生させています。

だからこそ、奥山を形成してきた「鎮守の杜」は私たち日本人にとって大切な存在であり、奥山と里山との上手なバランスを再生しないと、こうした課題は解決しないのではないでしょうか。

そして、令和６年度から国民が年間千円を負担する森林環境税の徴収が始まりました。この税金は、森林環境譲与税として、各自治体に交付されています。この税金の使途については、まだ明確でない自治体も多いようですが、私は地域の和の象徴である神社の鎮守の杜の維持管理費に充てたり、山のバランスを回復する奥山再生のための森づくり費用にも、その一部を充てていただくことで、多くの課題を解決できるのではないかと考えます。ぜひ皆さまも納めている税金のことですので、ご注目いただき、話題にしてみてはいかがでしょうか。

「和の心」と「鎮守の杜づくり」は、世界を救う鍵を握っている

明治神宮の「鎮守の杜」は、約１００年で現在のような深い森林になった人工林であることをご存知の方は多いと思います。現代ではさらに森づくりの科学が進み、こうした森を約３０年で作ることが出来ます（※「里山 ZEROBASE」が進める「鎮守の杜づくり」参照　https://satoyamazerobase.com/）。この技術は、日本から海外にも発信し、多くの地域で活かすことで地球温暖化対策にも有効であると考えます。

さらには、我が国を代表する環境学者の一人・東京農工大学の伊豆田猛教授によると、植物には私たちの目には見えない空気中の有害な化学物質を吸収し、綺麗な空気に換える機能があると言います。工場や車などから排出される光化学スモッグや排気ガス、中国から飛来する大量の PM2.5 などを、植物が吸収し綺麗な空気に換えているというのです。

皆さんが「鎮守の杜」に囲まれた神社にお詣りする時、空気や風が気持ち良いとか、何となく清々しい気持ちになるとか、心が落ち着く経験をしたことがあろうかと思います。「鎮守の杜」には、こうした科学的根拠からも私たちの生活や心を豊かにしている機能もあることもお伝えします。

最後に、何度もおさらいになりますが、大切なことなので重複してお話しすることもありますが、「鎮守の杜」は動植物と人間が調和して、自然との共存をしながら、私たちの生活を安定的に持続可能にしてきたたくさんの知恵が詰まった「和の心」の象徴です。

そして、現在、世界では SDG s をスローガンに、持続可能な社会を実現するべく様々な活動がされています。私は、これからの世界を救うには、この「和の心」と「鎮守の杜づくり」が必要不可欠なものと考えており、「鎮守の杜づくり」を通して、世界に「和の心」が広がっていくことを願っていて、「一般社団法人第二のふるさと創生協会」（https://d2furusato.com/）の活動を通して展開しています。

全国にある神社では、古来、「鎮守の杜」を守り、地域の平和と安寧のために、神々に祈りを捧げてきました。“神道における神とは、私たちの命を保証してくださる対象”。だからこそ、その土地にある雄大な自然だけでなく、人々の生活を豊かにした偉大な人物なども神と崇め、神社にお祀りすることで、持続可能な生活を実現するための知恵も子孫に残してきました。

また、『古事記』に描かれるように、神々がもたらした稲穂は、人々がその地で安定的に定住できるようになり、命を保証するものでもあります。ゆえに、米や籾種、米倉や農民そのものも神であり、稲作に関する祭りが全国の神社において、古来、続けられてきたのも、その理由からです。

「鎮守の杜」のある神社の境内では、神々の恵みである新米やお米で作ったお酒をはじめ、新鮮な魚や獲れたての野菜を、自分たちが口にする前に、先ず神々に捧げ、その年も豊かに生活できたことに感謝する祭りが行われてきました。祭りおいて、もっとも重要なことは“食べる”ことです。その年の命を育んでくれた神々に感謝し、その神々に捧げた“神饌（しんせん）”を祭典の後に調理していただく行事を“直会（なおらい）”と言います。その行事をすることで、ご神徳を体内にいただき、また次の年に向けての活力としました。故に、“食べる”ことは重要なことであり、他の命をいただくことで、自分の命を育んでいることにも感謝するのが、同時に祭りの意味でもあります。

そうした人々の深い思いが詰まった祭りという伝統文化は、全国の地域で固有の伝統文化を生みました。その地域の人たちにとって、「祭り」と「鎮守の杜」は、他の何にも代えがたい大切な伝統文化となっていて、神さまが存在するからこそ「鎮守の杜」があり、「鎮守の杜」があるからこそ神さまが存在するという相互関係も生まれました。

故に、「和の心」の象徴である「鎮守の杜」は、神社や地域にとって、かけがえのないものであり、現代を生きる私たちは「鎮守の杜」を守り伝えることをはじめ、適宜適所で「鎮守の杜づくり」をすることは、次世代に対して果たすべき役割の一つだと考えます。

ぜひご一緒に考え、ご一緒に行動しましょう。

（令和６年９月寄稿）